

19. <湯水の如く節約する？>

今年の夏、特に八月は天候が不順で、全く夏らしくなく、海水浴場やプールでは閑古鳥が鳴いていました。電気使用量も少なかったようですが、水の使用量もかなり少なかったのではないのでしょうか。

この夏に限らず、最近の傾向として、水道水の使用量は全体的に横ばいもしくはやや減の傾向があります。下水道でも水量が伸びないで、流入水質が高まっている箇所もあるようです。この原因としては、日本経済の低迷、高齢化社会といった要素に加えて、不景気のせいもあり、市民の節水意識が高まっていることもありそうです。

家電製品でも洗濯機や食器洗い機では節水型が売れ筋だそうですが、水洗トイレのロータンクにビールビンやペットボトルを入れて節水している家庭も多いと思います。

世界的に見ると、安全な飲料水を得ることが出来ない人々は11億人に上り、環境開発サミットでは「2015年までに安全な飲料水にアクセスできない人々の割合を半減する」ことが確認されました。この事実を考えると、良質な水道水をトイレの洗浄水として使うのは、大変贅沢なことではあります。

今年3月に京都で開かれた世界水フォーラムでは、節水型水洗トイレのセッションにかなりの人が集まっていました。何でも、欧米では水洗トイレの洗浄水量（大の方）は、1回6リットルが標準であるのに対して、日本では12～20リットルで、節水型でも8リットルだそうです。なお、シンガポールでは、何とわずか4.5リットルだそうです。

それでは、日本も節水型水洗トイレにすれば良いではないかという、そう簡単には行かず、まず、わが国の排水設備は小水量でちゃんと流せるのかという問題、また、日本人は完全に流れてしまわないと嫌がるという点、また、小水量だと勢いよくフラッシュする必要がありますが、日本人はその際、飛沫が飛ぶのを非常に嫌う（欧米人は平気らしい）といった国民性に根ざす課題があるということです。……とは言え、

既に衛生機器メーカーから節水型水洗トイレが多数市販されており、水洗トイレも次第に節水型が中心となって行くのでしょう。

ところで、少し前に、風呂に入らない、シャワーも浴びない、下着も替えないという「汚ギャル」が話題になりました。「汚ギャル」は、まさに究極の節水型ライフスタイルと言えます。ひょっとすると、最近では「汚ギャル」に加えて、「汚にいさん」「汚ヤジ」「汚バサン」等が密かに増殖中なのかも知れません。節水には大変良いことですが、衛生面では問題がありそうです。また、臭気問題発生も懸念される場所です。

ともあれ、社会的に節水志向は高まっており、「湯水の如く」という言葉も次第に過去のものになるのかも知れません。下水道もこれからは、節水型社会に対応したインフラシステムとしての事業経営が重要になると思われれます。

< 村上 孝雄 >

※No. 21号(2003/10/17)に掲載